



巻頭言

論文誌の国際化

後 藤 英 一*

今般、本学会の英文論文誌が年2回発行されることに決ったことは大変喜ばしい。オリジナルな論文は欧文化すべきであると筆者はかねがね主張して来たが、その第1歩がやっと踏みだされたと感じている。情報科学の論文の主題である新アルゴリズム、アルゴリズムの解析、新しいシステム構成、システムの効率解析などのいずれをとっても、本邦初演ということでは論文としての価値は認められず、国際的視野に立つオリジナルな部分が含まれている必要がある。またそのような論文は欧文で世界中に流布しなければその価値は著しく低減することも明らかである。

本学会には論文賞の制度があるが、論文賞を受けた優れた論文でも、外国における同一分野の総合報告に全く引用されないという例をいくつか見聞き、誠に残念というほかない。現在本学会はハードウェアよりもソフトウェアの方向に傾斜しているが、ソフトウェア面の欧文論文は書き難い面があるように見受けられる。因みにハードウェア面の論文誌である IEEE の “Transactin on Electronic Computrs” をみると日本人著者は 3% 程度あるが、ACM の “Communication” と “Journal” では 0.5% 以下である。またアルゴリズムとその解析の百科全書を志向している Knuth の “The Art of Computr Programming” の既刊第3巻までには 1,500 名の論文著者があげられているが、日本人著者は 7 名に過ぎず (現 IFIP 会長 Richard Isamu Tanaka 氏などは含めない) 比率にしてやはり 0.5% 弱となる。数式も図面も一枚もない Dijkstra の “GO TO Statement Considered Harmful” のようなスタイルのソフトウェアに関する論文は強烈な語学力を必要とするので、日本人にとっては最も苦手な部類に属するのであろうが、将来はこのよ

うな論争にも堂々と挑戦できるようにきたい。

“ローマは1日にして成らず” というが、世界に認められる欧文誌を刊行することは容易なことではない。欧文誌刊行の歴史が 100 年に及ぶ、数学会、物理学会よりも、この点に関しては発刊 10 年の JJAP (Japanese Journal of Applied Physics) の方が参考になろう。JJAP の海外購読者数は約 1,700 で、外国からの投稿も増えつつある。JJAP は物理学会と応用物理学会が協同して作った JJAP 刊行会から出版されているが、今日の状況にまで持ってくるには、10 年間関係者の努力は大変なものであった。

よい欧文誌を作るには、まず内容のよい欧文原稿が集まなくてはならない。この点については、日米コンピュータ会議の会議録に採択された、日本人著者による論文が、第1回、第2回ともに 300 頁以上あること、また実際の応募数はその3倍近くあったことなどから見て、応募論文数は充分に集まるのではなかろうか。問題はむしろ内容の査読と英文指導にある。論文誌の質は査読委員の質と投稿論文の内容のよさの積に比例するであろうから、必要ならば歴代会長、副会長、理事も含め学会関係者の大物査読委員を分野ごとに全国的に御願いするのが最良であろう。

欧文誌発行の財務負担が過重というのであれば、日米コンピュータ会議の場合のようにオフセット印刷にし、希望者のみ実費負担で組版するなど、やり方はいくらでもあるはずである。

年2回の欧文誌刊行が、季刊、月刊と発展し、世界のどの情報処理関係の図書室にいても CACM と JACM と並んで J. IPSJ があるようになる日が1日でも早く来ることに期待したい。

(昭和 51 年 4 月 2 日)

* 本会常務理事 東京大学理学部教授